

大阪教育大学紀要  
第II部門 社会科学  
生活科学  
第44巻 第1号  
平成7年9月

MEMOIRS OF OSAKA  
KYOIKU UNIVERSITY  
Ser. II, Social Science  
and Home Economics  
Vol. 44, No. 1  
September, 1995

## トピック性と修復活動

—— 会話における「スムーズな」トピック推移の一形式をめぐって ——

くしだ しゅうや  
串田 秀也

大阪教育大学社会科教育講座

## トピック性と修復活動

—— 会話における「スムーズな」トピック推移の一形式をめぐって ——

串 田 秀 也

大阪教育大学社会科教育講座

(平成7年4月28日 受付)

本稿は、会話のトピックが「スムーズに」推移するという現象を、特に会話における修復活動との関連で考察するものであり、私の前稿[串田1994]の姉妹編である。まず、Iではトピック性が漸進的な社会的拘束力として捉えられることを示し、これを受けてIIではトピック性と修復活動との関係が両義的なものであることを論じる。III、IVでは二つの会話データを分析することを通じて、修復活動がある一定の局域的な組織化を受けるとき、その帰結として「スムーズな」トピック推移が生じることを明らかにし、そこからトピック性と修復活動の関係についての従来の理解に修正を施す必要があることを論じる。本論の結びとしてVでは、このトピック推移形式が特別な仕方です「スムーズ」であることの意味を考察する。なお、VIでは本論に対する補説として、“repair”と“remedy”という概念の関係を理論的に検討する。

キーワード：トピック，トピック性，修復活動，会話分析

### I 社会的事実としてのトピック性

会話におけるトピック（話題）とは、言語学的な研究対象であるだけでなく、すぐれて社会的な研究対象でもある<sup>1)</sup>。私たちは日々、「話題について行けない」「話題に詰まる」などのフレーズであらわされる経験をしたり、そのときに語られている事柄と関連の薄いと思われる事柄に言及することに抵抗を覚えたりする。トピックとは、Adato が的確に指摘するように、個々の会話者に外在し個々の会話者を拘束するという意味で、正確にデュルケームの言う「社会的事実」である [Adato 1980, pp. 50-51]。

常識的には、トピックとは「それについて語られているところのもの (something that is talked about)」として観念される [West & Garcia 1988, p. 552]。しかし、上の認識に立てば、トピックは発話行為に対して作用する一つの拘束の様式でもある。より正確に言うなら、会話の中で「それについて語られているところのもの」が立ち現れるとき、それは不可避免的に、一定の様式で発話行為を可能にすると共に規制するものとして立ち現れる。トピックのこの社会的拘束様式としての側面を、ここでは「トピック性 (topicality)」と呼ぶことにする。トピック性とは、端的に言って、「それについて語られているところのものについて語れ」という命令／要求として会話者に向けられる、社会的な力である。一つ一つの発話行為は、相手に対してこの要求を向ける限りにおいて（あるいは向けている

と聞かれる限りにおいて)「トピック的語り (topical talk)」の一部を構成するといえる。

そこで、トピック性に関する社会学的研究は、その出発点を次のような経験に求めることができる。私たちが会話中にトピックの外在性、拘束力を実感するのは、多くは、自分が何か発話しようという構えを持つときである。そしてとりわけ、自分が発話しようという構えを持ちつつ、「いつ」それを発話するべきか、そのタイミングを待つ場合である。では、なぜ私たちはタイミングを待つのか。それは、タイミングを誤った場合、「なぜ今そんなことを言うのか」という問が相手に喚起されると想定されるからである。

ここで、「なぜ今そんなことを言うのか」という問は、単に認知的なものではなく道徳的なものでもある、ということが重要である<sup>2)</sup>。この問が道徳的なものである、ということこそ、トピック性が社会的事実であるということの核心にほかならない。

この間によって行われることは、発話の背後に「特別な動機」を予想することである。それは、動機の探索・動機の表明・表明された動機の評価・動機の評価に基づくその行為の(あるいはその人物の)道徳性の評定、といった一連の活動を可能にする最初のステップである。逆の方向から言えば、タイミングを誤った発話をするとは、その発話をした動機が「理解可能」で「望ましくないものではない」ことを、何らかの形で説明する必要に発話者を直面させる。

つまり、私たちがトピック性の拘束力を経験するのは、先行発話に自分の発話を連鎖させようとするときである。トピック性は単独の発話に作用するのではない。それは、発話行為と発話行為との連鎖的組織化に作用する拘束力の一種なのである。従って、トピック性は、私たちが発話をする仕方でも先行発話に連鎖させたりさせなかったりすることを通じて、またそれを通じてのみ発現する。

ところでトピック性は、社会的拘束力の一種として、一つの顕著な特徴を備えている。先に、トピック性とは「それについて語られているところのものについて語れ」という命令/要求だと述べた。この定式化は次のことを含意している。この命令/要求に応じる発話は、決して、「それについて語られているところのもの」を単に指示し、固定し、安定化するだけではない。それは当の「それについて語られているところのもの」を変化/推移させることによってこそ可能となるのである<sup>3)</sup>。Foppa の言葉を借りるならば、トピック性は本質的に漸進的な (progressive) 拘束力である [Foppa 1990, pp. 182-184]。このため、会話においてはしばしば、「それについて語られているところのもの」を固定しようとするのが、トピック性からの逸脱として(つまり「話の流れを損なう」ものとして)経験される。

私は前稿で、漸進的な拘束力としてのトピック性の基本的様相を、Sacks の言う「共一選択」の連鎖として記述した [串田 1994]。しかし、トピック性の漸進性にはまた別の側面もある。本稿では、この同じ主題を別の角度から照らし出すために、会話における「修復活動 (repair/remedy)」に焦点を当ててみたい<sup>4)</sup>。

## II トピック性と修復活動

Schegloff らによれば、「修復活動 (repair)」とは会話(および他の talk-in-interaction)において「話すこと、聞くこと、理解することにおいて繰り返し生ずるトラブル」 [Schegloff et al. 1990, p. 31] に対処するあらゆる営みを指す。彼らは、このような営みが言語学者の言う意味での「誤り (error)」の「訂正 (correction)」に限定されないことが

ら、従来の訂正という概念はより広い修復活動 (repair) 概念の一部として位置づけ直す必要があると主張する。ここから、順番取りの失敗・違反への対処、言い間違いへの対処、聞き損ないへの対処、誤解への対処、適切な言葉探しなど、広範な現象が修復活動として研究されてきた<sup>5)</sup>。が、現在のところ、それをトピック性との関連で論じた研究はあまりない。

しかし、以下に述べるように、修復活動はトピック性に対して独特の関係を持つものであり、両者の関係を考えることは、トピック性という主題にとっても修復活動の研究にとっても大きな意義を持つと考えられる。

まず、修復活動が会話中の出来事として独特の両義的性格を持つことを確認したい。修復活動は、何かを「トラブル」として、つまり、本来発効するはずだったことの失効として、マークすることによって開始される。このマークは、一方では「発効するはずであった発話」に注意を促し、その回復を相互行為上の課題たらしめるが、他方では「失効としてマークされた発話」そのものに注意を向けることも可能にする。Jefferson は、訂正の研究において次のような指摘を行ったとき、この両義的性格に気づいていたと考えられる。「訂正という営みは、単にものごとを正すという問題ではなく…能力および／あるいは活動における失策に特別に照準を合わせるという問題でもありうる」。それゆえ、訂正には説明活動 (accounting) と総称できる様々な他の活動 (教示する、不平をいう、許す、容認する、告発する、謝罪する、あざける etc) が随伴し得る。[Jefferson 1987, p. 88] では、この両義的性格はトピック性との関わりにおいてどのような意味を持つだろうか。

修復活動とトピック性との関係を正面から論じた数少ない研究として、Keenan & Schieffelin の研究がある [Keenan & Schieffelin 1976]。彼らは、会話においてトピックが成立するためには次の4つの手続きが踏まなければならないと言う。1. 会話相手の注意 (主に視線) の獲得、2. 会話相手による自分の発話の分節化された聞き取り、3. 会話相手による自分の言及対象の同定、4. 会話相手による自分の命題の分析、である。これらの手続きが踏まれた場合、会話相手は話者が作りだした特定の命題「について」次に発話することができる<sup>6)</sup>。ところが彼らが詳しく研究した幼児と大人の会話においては、これらの手続きが単一の発話において完了することは希である。むしろ、幼児と大人の会話の大部分は、これらのいずれかの点でのトラブルに対処する修復活動によって構成されている。従って、そうした修復活動とは、定立し損なったトピックを再定立するものなのである。

このモデルは、要するに、修復活動がトピック性の前提条件に関わるものであり、修復活動の開始はトピック性の一時的保留であるということを主張している。ここから帰結することは、修復活動の完了／成功が定立し損なったトピックの再定立を意味し、続く発話は「その」トピックについてのものになる、ということである。つまりここでは、修復活動は Jefferson の言うサイドシークエンスを不可避的に形成することになる。現在まで、会話分析的研究の中で修復活動として取り上げられるケースは、ほとんどこの場合である。

確かに、修復の開始はトピック性の保留であるとも言えるかも知れない。しかし、トピック性の漸進的性格を踏まえるならば、また修復活動の両義的性格を踏まえるならば、保留後のトピック性の再組織化は二つの方向に向かう可能性を持っている。第一は、Keenan & Schieffelin が考えたように、「失効としてマークされた発話」を無効化し、発効するはずであったトピックを回復させるという方向での再組織化である。しかし第二に、「失効としてマークされた発話」そのものに「特別に照準を合わせる」ことによって、それを発

効するはずであったトピックとは別のトピックの端緒として再構成するという方向での再組織化もありうる。すなわち、修復の開始はトピック再定立に至るサイドシークエンスの端緒になり得るだけでなく、トピック推移の端緒にもなり得ると考えられる。

では、「失効としてマークされた発話」を別のトピックの端緒として再構成するとはどのような場合だろうか。その分かりやすい例は、「失効としてマークされた発話（部分）」がたまたま同音異義性を持つ場合である。このとき、その発話とはもはや失効ではなく、別のものとして発効し得るのである。しかし、そのような例外的ケースだけではない。「失効としてマークされた発話」がいかなるものであれ、そこにはそれを発話した話者がいる。相手は「この話者がこの失効をした」ことに常に注目可能である。つまり、その発話が「話者に関して何かを意味している」という聞き取りは常に可能なのである。またそれは、単に話者だけでなく、それを失効たらしめるような「話者との会話者との何らかの差異を意味する」ものとして聞かれることも可能である。従って、修復の開始は、トピック再定立につながるだけでなく、一般に「失効としてマークされた発話」への会話者たちの関わり方に由来するトピック導入に、そして特殊には同音意義性に由来するトピック導入につながり得るという意味で、独特な仕方でもトピック性を再組織化する可能性を持つ。

そこで、トピック性と修復活動との関係に対する問いは、こう立てられるべきである。会話中に修復が開始された場合、その後のシークエンスの進む方向が、どのような局域的組織化によって決定されるのであろうか。

以下では二つの会話断片の分析を通じて、この間に答えて行きたい。私は前稿において、Sacks が指摘した「共一選択」という記述用具を土台にして、会話における「切れ目ない」トピック推移の記述を試みた [串田 1994]。ただ、その研究の過程で、共一選択という記述用具だけでは十分に捉えられないいくつかの会話断片にも出会うこととなった。それらの会話断片は、共一選択の連鎖だけでトピックが推移しているのではないという意味で「切れ目ない」ものではないが、しかしトピック推移の研究の中で従来指摘されてきたようなトピックの境界づけマーカーは用いられておらず<sup>7)</sup>、ごく「スムーズに」トピックが推移しているという印象を受けるものであった。ここでとりあげる二つは、その代表的なものである。

### Ⅲ 「長引かされた」修復の開始

1 データ1「暗くてハスキー」 (3人の女子学生が、うち一人の部屋で、以前自分達の会話を撮ったビデオを見ながら会話している。20秒ほど今見ているビデオについての会話が続いた後)

001 {5.3} [全員ビデオを見ている]

002 B: あたしこんな声してるーん まだ言ってる「けど

003 C: (まだ言ってる 君この時も言ってた

004 でしょー

005 A: んー

006 B: うん

007 {1.4}

008 C: うん そうそう あたしでも今日声違うかもしれん 風邪ひいてる

009 B: (うん



029-040では「心理学の本の話」と呼び得るトピックについて会話が行われている。最後に、従って、データ1では途中のどこかで「風邪声の話」と呼び得るトピックから「心理学の本の話」と呼び得るトピックへの推移が生じている。

2 二つの笑いリピート では、データ1において、「心理学の本の話」と呼び得るトピックはいかにして導入されているであろうか。導入にいたる過程に、修復活動がどのように関与しているであろうか。

考察の糸口になるのは、「暗くてハスキー」というフレーズのリピート(019)である。リピートとは、Jeffersonによれば、先行語句の単なる復元ではなく、反復を受ける先行語句に対して何らかの操作を行うものである。

Jefferson はリピートによって行われる操作の例を4つ挙げている。第一は、質問調のイントネーションで発話されるリピート(以下、質問リピート)に見られるもので、先行発話に対する不信や驚きを示すものとして聞かれるものである。質問リピートがこのように聞かれる場合、それは、先行語句を発した話者がリピート直後のターンで、先行語句に向けた(先行語句の説明となる)発話をするを要請する。第二は、笑いの徴(laugh token)を伴って行われるリピート(笑いリピート)に見られるもので、先行語句に対する承認や楽しみを示すものとして聞かれる。笑いリピートがこのように聞かれる場合、それは先行語句を含む語りに終了の可能性をもたらすという操作を行う。仮に、終了がもたらされない場合でも、それは終了の可能性に抗する何らかの別の操作によってもたらされたものと見なすことができる。第三は、以上の二つのパラ言語的徴を持たないリピートで、先行語句に対する正しさの認定、肯定を示すものとして聞かれ得るリピートである。このリピートは、先行語句の話者が続けて話すことを準備する。第四は、質問リピートが不信や驚きを示すものとして聞かれない場合である。この場合、質問リピートは先行語句に関するさらなる情報のストレートな要請、という操作を行う [Jefferson 1972, pp. 299-303]。これらのうち、第一と第四は、修復活動の開始を意味し、第二はトピックの境界づけを意味するといえる。

さて、019は「笑いリピート」である。従ってまず、019は先行トピックに終了の可能性をもたらしている可能性がある。しかし、Jeffersonによれば、笑いリピートは、終了の可能性をもたらす以外にもう一つの操作を行い得る。笑いリピートが「～と共に笑う(laughing with)」として聞かれる場合、それは終了の可能性を生む。しかし、「～を笑う(laughing at)」として聞かれる場合、それは修復(remedy)の開始と成り得る [Jefferson 1972, pp. 300-301]。では、019はどちらだろうか。

019は、それ自身としては、どちらとも聞こえる。しかし、021でこの発話にかぶせてBは、ユニゾン<sup>9)</sup>を行い、笑っている。Bは021で、019を「共に笑う」として聞いたことを表示しているように見える。だが、次に、022-023と025におけるCとAの発話は、「を笑う」の方に019を言い直しているように見える。さらに、027-028においては今度はCとAがユニゾンを行っている。しかも、027におけるCの視線の方向は、興味深いことに、「そー」の部分ではAの方を向き、「じゃないのよね…」以下ではBのいる方向の正反対の誰もいない方向に向いているのである。それはBと「共に笑う」ことを効果的に拒んでいると見える。027-028は、いわば、リピートをやり直し、「を笑う」の方のリピートとして確立させる試みにみえる。従って、020-028の部分は、笑いリピートの二つの聞き取り可能性の間での「せめぎあい」の過程として記述できる。この部分は、二つの力が織りなす複雑な相互行為なのである。

この一連のやりとりの結果、019は今や「を笑う」の笑いリピートとして、つまり修復の開始として差し出されたと考えられる。では、続く部分は先に述べた二つの方向のいずれへと組織化されたであろうか。また、ここでマークされた失効とはどのような失効であろうか。

**3 長引かされた修復活動** 029以降の続く会話を見る限り、これがサイドシークエンスとしてトピックの再定立に向かうものでなかったことは明かである。なぜそうなったのか。

2つの点を指摘できよう。第一に、ここで「発効するはずであった発話」としての訂正語句は、既に025において、修復の開始の成立前にAが提示している（「ガラガラ声」）。第二に、笑いリピートが最終的に「を笑う」として差し出されたとしても、一度は「共に笑う」として成立しかけ、途中でもBはやはり笑っていた、という経緯は複雑である。ことここに至っても、笑いリピートは「単なる修復の開始ではないもの」として差し出されていると思われる。

このことは、よく似た次の会話断片と比較するとわかる。

〔比較データ1. 「いっしゅうかん」〕

（以前は小食だったが、最近は大食になったという話をしている）

- 001 B: でもアイスクリーム食べなくなったよ {0.5} ここ1週間 {ぐらい  
002 C: {ああああ  
003 A: いっしゅうかん「かーんはははは  
004 C: いっしゅうかん [笑]  
005 B: かーんはは 1週間食べてないねん  
006 A: 1カ月とかやなあ そういうのをここんとこ {て言うねん  
007 C: {そうそう 1んそう  
008 B: {1週間のうちで食べ  
009 たの あの一板チョコモナカの半分  
010 C: で今日ハーゲンダッツ食べたでしょ  
011 B: あ食べたなー しまったしまった 1んはは  
012 A: 1んふふーっははー  
013 C: 1んふふー  
014 C: 甘いなあー {まだ  
015 B: 甘かったなあ

A・Cの笑いリピート（003-004）は、ここでも両方の聞き取りが可能であるが、Bはまずそれを「共に笑う」として処理する（「かーんはは」というユニゾン）と共に、続いて自分の先行発話を言い直す（＝修復の開始の否認として）ことで、「を笑う」の意味合いにも直ちに応じている（005）。従って、続くAによる訂正語句の提示（006）は、データ1の場合とはシークエンス上の位置が全く異なるのである。

二つのデータは、上記2点（訂正のタイミング・修復開始の成立時期）における相違をのぞいては酷似している。しかし、後者は従来修復活動として論じられてきたシークエンスの一種（＝開始された修復の否認）であるのに対し、前者は違う。この相違を考える上で、最大のポイントはもちろん、データ1においては修復の開始が「せめぎあい」によって「長引かされた」ことである。

この結果として、データ1では、次にくるべき発話にいくつかの制約が課せられている。

第一に、修復の開始以前に「発効するはずであった発話」が提示されてしまっている以上、その単なる再提示では、開始に応えたことにならない。第二に、笑いリピートが「共に笑う」をも含んで差し出されているため（つまり、B自身がそれを「笑うべきこと」だと認めていることが表示されているため）、修復開始の否認や「失効としてマークされた発話」への単なる弁明では十分でない。ここでは、これら二点を共に引き受けるような何らかの説明活動を行うことが失効への対処としてレリヴァントになっているのである。

続くBの発話（029-030）は、見事にこの複雑な要請を満たしているように見える。それは自らの「失効としてマークされた発話」そのものを「共に笑う」べきこととして説明するのに成功している。そして、その説明活動の際に「心理学の本の話」と呼び得るトピックが導入されているのである。

Schegloffらは、自己修復の構造的選好（preference）という発見を論ずる中で、他者によって開始された修復は複数の（時に多数の）ターンを経て完了することを指摘した [Schegloff et al. 1990, p. 41] が、修復の開始そのものが複数のターンを経て成し遂げられる、という事態までは想定していない。しかし、彼らの議論の延長上にはこのような事態が有り得るのであり、これまで扱われてきた典型的な修復シークエンスも、このような可能性に並ぶ「一つの」組織化のされ方だと捉える必要がある<sup>10)</sup>。そして、データ1において以上のようにトピック推移に至るシークエンスが形成されたのは、修復の開始部分のこうした「長引かされた」局域的組織化によるものと、ひとまずいえよう。

ところで、私はこれまで、データ1のように修復活動が組織化されることを、「失効としてマークされた発話」が別のトピックの端緒として再構成され、それを契機にトピックが推移する事態として論じてきた。また、この限りにおいて、従来の修復研究に対するここまでの批判は、修復の開始がトピック性に対するサイドシークエンスを形成するとは限らない、ということに過ぎない。いわば、トピック研究サイドからの批判であり、これに対しては、そのようなケースはそもそも修復活動としては達成されなかったのだ、という反論が可能である。

しかしここでさらに、次のような疑問が湧いてくる。実は、データ1のようなケースもやはり修復活動なのではないだろうか。もし、ある発話がひとたび失効としてマークされたとき聞き得るなら、それがどちらの方向に再組織化されるにせよ、それは何らかの仕方ですら「失効への対処」であり修復活動であるのではないか。「失効としてマークされた発話」を別のトピックの端緒として再構成し、かくしてトピックを推移させることは、それ自体修復活動の一形態なのではないか。

実は、トピック推移の研究においては、この考えに呼応する指摘がすでにある。Maynardは、会話分析的なトピック研究の先駆けとなった論文で、一つのトピックの終了後に改めて別のトピックを開始する（「境界づけられたトピック推移」）手続きの一環として、両者の間に比較的長い沈黙が継起することを挙げている。彼はこの種のトピック推移を、話者移行（順番取り）の失敗への修復活動（remedy）だと解釈する [Maynard 1980, pp. 265-268]<sup>11)</sup>。この解釈が正鵠を射ているとするなら、順番取りの失敗への修復活動以外にも、トピック推移が修復活動の一形態として機能するという事態を想定することはできるはずである。この場合、われわれはトピック研究サイドからの批判だけでなく、むしろ従来の「修復活動」概念そのものに修正を施す必要がある。

問題はこうである。Jeffersonは、修復活動に種々の説明活動が随伴することを指摘したが、それらは単に「随伴する」ものなのだろうか、それともそれ自体「修復活動」の一

部をなすのだろうか。Jefferson 自身はこのような問いを立ててはいない。私の解釈では、そのような問いに一般的に答を出すことには意味がない、それは局域的に組織される、というのがJefferson の考えではなかったかと思われる<sup>12)</sup>。この考えに立つとすれば、「失効としてマークされた発話」に照準を合わせた種々の説明活動は、ある場合には修復活動の一部として記述することが可能である。

この視点から再び、「を笑う」と「共に笑う」との「せめぎあい」という事態を考えてみよう。この両者において異なるのは、単に笑いリピートによってなされる操作だけではない。むしろ、そうした操作の相違は、双方において設定される会話者の「参与の構図」の相違と相関的に生じるのである<sup>13)</sup>。ここで生じているのは二つの参与の構図の「せめぎあい」でもある。018のBの発話は単なる質問というよりむしろ一種の「おどけ」に聞こえるが、続く部分が「せめぎあい」だという記述が適切であるとすれば、そこでBは自分の投企した参与の構図が「AとCがBを笑う」ではなく、「AとBとCがBを笑う」であったことを表示しようとしていると考えられる。従って、ここでの「トラブル」とは、単に「発効すべきであった語句と違う語句が発話された」というようなことではなく、むしろ「投企された参与の構図の失効」であると思われる。

こう考えると、Aによる「ガラガラ声」という訂正語句の提示が修復の完了とならないのは当然である。それは、CとAがB「を笑う」という参与の構図の一部をなすような発話デザインで提示されているのであって、なんら失効した参与の構図を回復するものではない。反対に、029-030のBの発話「なんかねこういうところにも…」は、全員による笑いを可能にしており、ここで初めて参与の構図が回復されている。要するに、ここでの修復活動が「長引かされている」ということの意味は、訂正語句（発効すべきであった発話）の提示という出来事が、投企された参与の構図とは異なる構図の中で生じ、参与の構図の回復はむしろ「失効としてマークされた発話」そのものに照準を合わせた説明活動を通じてはじめて行われた、ということなのである。

Maynard は、順番取りの失敗としての沈黙が新たなトピックの導入によって修復(remedy)されると指摘したが、その理由は、新たなトピック導入によってスムーズな話者移行が回復されるからであった。しかし、データ1への以上の解釈が妥当だとすれば、スムーズな話者移行(=長い沈黙の不在)が回復されても、なお修復活動が完了しないということも有り得る<sup>14)</sup>。この意味で、新たなトピック導入が修復活動として作用することを、もっぱら順番取りに結び付けたMaynard の解釈は早計であったのではないか。むしろ、スムーズな話者移行の回復は、上に述べたような参与の構図の回復というより広い事態のスペシャルケースなのではないか。修復の対象となる参与の構図が複雑な場合、話者移行の回復だけでは不十分なこともあるのである。

**4 共メンバーシップの利用** 以上、私は、データ1において「心理学の本の話」と呼び得るトピックが、「暗くてハスキー」という語句のリピートによってマークされた「参与の構図の失効」への修復活動を完了するものとして導入されるに至った、という分析を行ってきた。しかし、このトピック導入は、029-030の発話によって単独で行われたわけではない。冒頭に述べたように、トピック性は発話と発話の連鎖としてのみ発現するのであって、ここでのトピック導入も、033のCの発話が029-030のBの発話に共一選択的に連鎖させられたことによって完成しているのである。

従って、029-030の発話がいかにシークエンス的に組織されているか、という以上の分析は、まだ「心理学の本の話」というトピック導入の片面でしかない。データ1を見て印

象的なことの一つは、029-030のBの発話が「心理学のなんか」という極めて省略的な語句で始められているにも関わらず、AとCはそこまで聞いて直ちに笑いで応じていることである。このため、このトピックの導入は特別に「スムーズな」印象を与える。このことはいかにして可能になっているのか。

Schegloffによれば、人は特定の発話デザインを選択するとき、自分と聞き手のメンバーシップ分析を行っていると考えられる。発話デザインは、話者が行ったメンバーシップ分析の表示である [Schegloff 1972, pp.88-96]。この観点からは、019-028は、「気取った語彙を使う者/使わない者」というメンバーシップ分析（→「を笑う」）と「それを可笑しいと感じる者」というメンバーシップ分析（→「共に笑う」）に即して展開している。

では、029-030において行われているメンバーシップ分析はどのようなものだろうか。この直後に、Cが机の上にあった本を「これ」と言及し、「面白かった」と述べ、AとBも直ちに同意していることから、3人は心理学に関係あると思われるこの本を皆読んだことがあり、しかもそのことを互いに知っている、ことが推測される。Bの発話は、このようなメンバーシップ分析を前提にしていると聞こえる。実際、後で会話者の一人に尋ねたところ、この本は「心理テスト」の本であり、3人はこの会話の数時間前にこの部屋でこのテストを共にやってみており、その本がそのまま机の上に放置されていたのである。従って、029-030においてBは、「数時間前に一緒に心理テストをした者」というメンバーシップ分析を行っていると考えられる。

ここで重要なことは、この発話が単に新しいメンバーシップ分析を導入しているのではない、ということである。この発話は、先に述べたいずれのメンバーシップ分析とも適合する。つまり、ここでは修復活動の中で登場した二種類のメンバーシップにさらに加えて、第3のメンバーシップが付加されているのである。もし、これが先行発話で措定されているメンバーシップに適合しない、単なる新メンバーシップの導入であったなら、それは決して開始された修復活動への応答にはなりえないだろう。この発話は、修復活動を通じて行われた二種類のメンバーシップ分析のいずれとも適合しつつ、新たな共通のメンバーシップを導入する極めて巧みな発話なのである。

結局、データ1におけるトピック「心理学の本の話」は、参与の構図の失効を共メンバーシップを利用した発話によって修復する中で導入されている。参与の構図が回復され得たのは、共メンバーシップに訴える発話がなされたからであるが、他方で、共メンバーシップの存在は、「今ここ」における参与の構図が協働的に回復されたことによって確認される。両者の関係は、このように循環している。そして、この循環する運動が、ここでのトピック導入が特別な仕方ですべて「スムーズ」になるのを可能にしたと考えられる。

データ1では、修復の開始部分が「長引かされた」形で組織化されることで、共メンバーシップを利用した説明活動が修復としてレリヴァントになり、それを契機としてトピック推移が果たされたことを見た。しかし、「長引かされ」得るのは修復の開始だけではない。われわれは、修復の実行部分が長引かされたケースをデータ2に見ることができる。

#### Ⅳ 「長引かされた」修復の実行

1 データ2「ホテル」 （3人の男子学生が大学の研究室で弁当を食べながら会話している。アダルトビデオについての会話の途中で、BがAV女優の出でくる「大人の絵本」というテレビ番組に言及し、続いてそのテレビ局のその時間帯の番組がどのように変わっ

てきたかを語り始める。)

001 B: [着席しながら] それでね そーいうのがあったんです

002 A: んー

003 B: でそれから「大人の子守歌」鶴光が司会やったんですよ 「その頃ね

004 A: しょうん

005 A: 俺ねー鶴光のやつを何回か見「た

006 B: 見てたでしょ

《中略》

007 B: でそっからね

008 A: んー

009 B: 「男のララバイ」ってゆうのに移ったんです

010 A: あー

011 B: で「男のララバイ」はオール巨人があつたの

012 A: ほおー

013 B: あのやってて 「中心で

014 A: ほおほおほお

《中略》

015 B: でそれでーあの「応オール巨人の宣伝の「おとーこのララバイ」は終わったんで

016 す

017 A: おーおー

018 C: へー「え

019 B: でその後にたいへーSーーーーー一郎かな

020 A: うん

021 B: のーうーまた番組が始まったんです

022 A: うんうん

023 B: で でーやと今「おとー なの {0.7} 子守歌」やっ

024 A: 絵本

025 B: 「大人の絵本」に変わっ たん です よね

026 A: うんうんうん

027 A: ほお「ー

028 B: はい でやんちゃな小猫の宣伝が始まったのは大体これぐらいからなんで

029 すわ

030 A: 何やんちゃな小猫「って?

031 B: (ホテルの「宣伝なんですけどええ

032 C: (ホテルの「あれ」ですわね

033 A: やんちゃな小猫「つうの?

034 B: はい

035 C: ええチェーンで

036 A: あほんと

037 C: はい

038 B: あるんですやんちゃな小猫

039 A: ホテルなら詳しい [Cを指さしながら] なっ

040 B: ホ「ホテル詳しいですね おく おくてなくせにねー

041 C: ーいえいえ

042 C: いえいえいえいえ

043 B: これをえー {0.9} これをビデオ撮っというてヨメにー「えーおっくいろいろい=

044 C: ーっふっふっふっふ

045 B: =ろー

046 A: んーここどうっつって?はっはっはっは

(この後、CとCの恋人についての会話がしばらく交わされる。AV・テレビ・ホテルに関する話はこれで終わる。)

データ1の場合同様、ここでもまず、いくつかの観察事項を述べることができる。第一に、データ2のはじめから029までは、Bがテレビ番組の変遷を語っている。第二に、030-038の部分は、028でBが発話した「やんちゃな子猫」という言葉に言及している。第三に、039の発話「ホテルなら詳しい」の主語はCであるらしい。第四に、最後の040-046の部分では、「Cとその恋人の話」と呼び得るトピックについて会話が行われている。(この点については、043で「ヨメ」と呼ばれているのがCの恋人である、という背景情報が必要である。ただし、このことはこの録画された会話のこれ以前の部分から明らかになるのであって、録画された会話以外の情報源は必要ない。)最後に、従って、この断片の途中のどこかで、「Cとその恋人の話」と呼び得るトピックが導入されている。

**2 物語りにおける他者修復** では、このデータにおいて、「Cとその恋人の話」と呼び得るトピックは、いかにして導入されているであろうか。

考察の糸口となるのは、Aによる修復の開始(030)を受けて、BのみならずCも修復活動を行っていることである(032,035,037)。Schegloffらの指摘によれば、他者修復は「構造的に選好されない」選択肢であるが、ある特殊なシークエンス的環境のもとでは実際に生じる。それは物語り(storytelling)シークエンスである。そこでは、語り手以外の他者が修復活動を行うことにより、その他者は物語りの共-語り手(co-teller)として、あるいは語り手と「チーム」を形成する者として、自らを差し出す[Schegloff et al. 1990, p. 53]。

データ2では、語り手Bは自己修復を行っているが、他者Cもほぼ同時に修復を行っている(031-032)。しかもCは、「あれですねえ」とBに同意を求めるような発話デザインを選択している。従って、031-038の部分では、Schegloffらが言うように、両者はチームとして振る舞っていると、まず見なせる。しかし、ここでの他者修復は、Schegloffらが扱ったような他者のみによる修復ではなく、自己修復と他者修復が両方生じているのであり、その意味でCによる修復は、修復活動としては「冗長」である。ここからまず、031-038の発話は単にチーム形成として組織されているだけではない、と予想される。

**3 物語り退出装置** 実は、冗長なのはCの発話だけではない。修復シークエンスとして見た場合、035-038はみな冗長である。Bの「失効としてマークされた発話」(028-029)を準拠点として考える限り、修復は034で完了している。言い換えれば、034はBが語りを再開・継続するのにふさわしい位置である。しかし、Bはしない。この観点からは035-038の全体が冗長であるが、035が発せられた以上、036-037はひと続きのシークエンスを形成する。が、038は違う。038は再びBが語りを継続し得る位置だからである。従って、038におけるB自身の修復活動も冗長なのである。

ここからまず、038においてBは物語りの継続放棄を表示しているということが考えられる。しかし、一般に、物語りからの退出は単に継続を放棄することによってではなく、後続する会話を引き出すために（例えば、物語りの本題からは離れた事柄に話を向けるなど）物語りの要素の一部を「退出装置」として用いる形でなされる、と指摘されている [Jefferson 1978, p. 229]。この指摘を踏まえると、038は単にチーム形成として組織されているだけでなく、退出装置としても組織されているのではないか、と思えてくる。少なくとも、038を「**Cの言うとおりにチェーンで、やんちゃな子猫**という名のホテルがあるんです」と聞くことは、Aには与えられた可能性である。この場合、038はCの知識を肯定し、Cがそれを知っていたことをマークするものとなる。このマークは、物語りの本題からは離れた要素に向けられており、物語り退出装置として機能しうる。

ただ、物語りからの退出ということを考えるなら、そもそも028で「やんちゃな子猫」を持ちだしたBの発話が、退出の試みとして聞かれ得るのではないかと考えられる。この物語りの本題は「ある時間帯のテレビ番組の変遷」であり、「CMの話」はまさに「本題から離れた要素」だからである<sup>15)</sup>。そして028が退出の試みとして聞かれる場合、028は、単にAが同定できない語句をBが発話したという意味で失効であるだけでなく、物語りからの退出の試みという投企された参与の構図の失効でもあることになる。

030-038の修復シークエンスは、単なる修復ではなく、また単に他者修復によってチーム形成が行われているだけでもなく、物語りからの退出の失効とそれへの修復による退出の完成、というより大きな文脈によっても組織されていると考えられる。

従って、ここにはデータ1の場合とよく似た構図がみられる。物語りからの退出は、まず形式的には turn by turn の語りが回復されることによって成し遂げられる。この意味では、データ2の030-037において既に退出は成し遂げられ、028の失効が物語り退出の失効であるとしても、その修復は既に完了しているかに見える。しかし、Jefferson が指摘するように、退出の試みにおいては、turn by turn の語りが回復されることだけでなく、いかなる形の回復なのかも同時に志向されていると考えられる [Jefferson 1978, p. 233]。データ2の場合、028-029は最初から最後までAの方を見て発話されており、Bの物語りの始まりが「大人の絵本」という番組への言及であったことも考えると、030-037は少なくともBが志向した退出の形ではなかったはずである。ここでは、投企された参与の構図は依然失効している。

**4 三重に有徴な発話** では、失効した参与の構図はいかにして修復されたであろうか。ここで鍵になるのが、先に述べたもう一つの退出装置候補(マークされたCの知識)である。

038までで、Cの一連の発話 (032, 035, 037) は「有徴」なものとして構成される。Cは、第一に、語り手ではないのに修復を行い、第二に、語り手Bはそれを退出装置としてマークしていると聞けるような発話をしている。しかし、Cの一連の発話を有徴なものとしてマークするのは、038のBの発話だけではない。さらに別のレベルの組織化が働いていると考えられる。

実は、Bの長い物語りの間、主たる聞き手はAであり続ける。この間、Cはほとんど発話していないし、あいつちも少ない。また語り手Bの視線の方向もほとんどAの方を向いている。従って、032からのCの一連の発話は、個々のターンを越えたレベルでのCの参与の水準が変化したものとして経験され得る。いわば、Cは「ホテルの話になったら、突然話に加わってきた」のである。このことは、やはり物語りの途中で他者修復によるチーム形成が行われている次のケースと比較すると、よくわかる。

## 〔比較データ2. 「トチュウ茶」〕

- 001 B: このごろお茶がはやりらしいですねーなんか  
 002 {0.6}  
 003 A: うん あ トチュウ茶と「かいうのがえらい はやってるんやろ  
 004 B: はい  
 005 B: はい  
 006 A: このあいださー うちの近所でトチュウ茶安う売ってたんよ  
 007 C: トチュウ茶?  
 008 A: トチュウ茶  
 009 C: トチュウ茶  
 010 B: きへん「につち  
 011 A: 知らん?  
 012 C: どーいう「字?  
 013 B: きへんにつちと  
 014 A: うん  
 015 C: きへんに「つち?  
 016 B: にんべんのなか  
 017 A: うん {0.8} でお「茶いうさー  
 018 C: はいはいはい  
 019 A: うん 「で入っててさー  
 020 B: えあれー  
 021 B: あれにんべん「だっけ  
 022 A: うちの近所で安う売っててん 198円かなんかで あ安いわー飲んでみよう思  
 023 うて〔頷く〕買うて 1ばい飲んで捨ててもーた

このデータとデータ2との第一の相違は、他者修復が物語りシークエンスのどの位置で生じているかである。「トチュウ茶」においては、物語りの開始時点から、Bは共一語り手として聞かれ得る発話をしている(001,004,005)。この物語りは、最初からAとBのチームによって語られており、Bの参入(010)は物語りシークエンスに照らして特別な有徴性を持たない。第二の相違は、修復活動が「長引かされて」いないことである。「トチュウ茶」における修復シークエンスも多くターンを経過しているが、語り手Aは、Bによる「きへんにつちと」「にんべんのなか」という修復の完了の後、直ちに語りを継続している(017,019)。要するに、「トチュウ茶」における修復シークエンスは、まさに Schegloff らが扱ったような、物語りシークエンスに対してサイドシークエンスを構成するものである。

これに対し、「ホテル」のCは032で初めてチーム形成を試みたことになる。Cの参入は物語りシークエンス全体からみて有徴であり、物語りシークエンスにおける「局面の変化」を構成する効果を持つことになる。先に、028の発話が物語り退出の試みとして聞かれ得ると述べたが、物語りからの退出はあくまでも協働的営みである。028は単独では、物語りの継続として聞かれることも可能なものであり、それを退出の試みとして構成するのは、Cの参与水準の変化に他ならない。結局、データ2における物語りからの退出は下図のような手続きを順に踏むことで達成されていると考えられる。

「本題から離れた要素」 → 「Cの参入 (他者修復)」 → 「Cの知識のマーク」  
 「物語り退出局面構成」 → 「Cの発話の有徴性」  
 「退出装置1」 <退出の失効> <退出装置2> <退出の完成>  
 <修復の開始> <長引かされた修復の実行> <参与の構図の回復>

そして、ここでの修復の開始が、物語りからの退出の失効をマークするものでもあったことに照らせば、修復の完了は034ではなく038だと考えるのが適切である。034はAが「やんちゃな子猫」を同定し損なったことへの解決ではあるが、物語りからの退出という課題を十分に解決するものではない。038はいわば、退出をやり直し、Bが投企した参与の構図での退出を完成させる試みなのである（038でのBの視線は、「あ」の時Cに向き、「るんですやんちゃな子猫」の時Aに向いている。この視線の動きは、038でBがCの知識をマークすると共に、それを利用してAと共に退出することを再度試みている、という以上の記述を裏付けられると思われる。）039「ホテルなら詳しい」は、単に「Cがホテルに詳しい」ということを陳述しているのではなく、以上のように多重的に組織された文脈の中で、物語りからの退出を完成させるとともに、新たなトピックを導入しているのである。

要するに、ここでもデータ1同様、「やんちゃな子猫」の言い直し（発効すべきであった発話）の提示が、投企された参与の構図とは異なる構図の中で行われ、参与の構図の回復は「失効としてマークされた発話」そのものに照準を合わせた説明活動を通じてはじめて行われた、という意味で「長引かされた」修復活動が見られる。ただしここでは、既に修復の実行が試みられているため、「失効としてマークされた発話」だけでなく、それを契機として照らし出された会話者の差異（Cはそれを同定できた）をも利用した形で、トピック推移の端緒が作られたと考えられる。

**5 共メンバーシップの利用** 最後に、データ1同様、ここでもこのトピック導入が特別な仕方では「スムーズ」なものとして成し遂げられていることを見て取ることができる。039のAの発話を受けて、BとCは直ちに、ほぼ同時に反応を返している。では、ここにもデータ1同様の、共メンバーシップの利用が見られるであろうか。

030-038の部分が発話に際して行われているメンバーシップ分析から考えれば、「やんちゃな子猫」という名のホテルを「知る者」「知らない者」というメンバーシップ分析に即して発話が行われている、ということができる。では、039「ホテルなら詳しい」で行われているのはどのようなメンバーシップ分析か。

実は、この発話によって導入される「CとCの恋人の話」は、この会話断片の約25分前に同じ会話の中で一度登場したトピックであり、そのとき「Cがおくてである」という命題も語られている。BがAの発話に直ちに反応し、「おくてなくせにねー」といい添えているのは、Bがこの過去のトピックを直ちに想起したことを表示している。つまり、Aは039でこのことに関するメンバーシップ分析を行っていると考えられる。

先行部分は、「やんちゃな子猫というホテルを知る者/知らない者」というメンバーシップに即して会話が行われているが、039はこれに加えて「Cに恋人がいることを知る者」という共メンバーシップを導入するのである。ここでもやはり、AがCを指さして「ホテルなら詳しい」と発話することは、先行する（B、C vs Aという構図で割り振られた）メンバーシップと適合しつつ、しかも共メンバーシップにも訴える極めて巧みな発話であるということができる。

以上のように、データ2も、1.「長引かされた」修復を完了するものとしてトピック

推移が果たされ、2. それは共メンバーシップを利用して行われている、という点で、データ1と同一の形式を持っている。ただ、両者の相違は、データ2において「長引かされて」いるのが修復の実行部分であるということである。

**6 トピック性と修復活動の修正された見取り図** われわれは、二つのデータの分析を通じて次のことを確認できた。会話中に修復活動が開始された場合、後続するシークエンスはその局域的組織化のされ方に応じて、トピック再定立シークエンスとなることもあれば、トピック推移をもたらすシークエンスとなることもある。ただし、修復活動を投企された参与の構図の回復過程として捉え直すことによって、後者も前者と同様修復活動として記述することができる。

私はこのように、修復活動をもっぱらサイドシークエンスと考える視点を拡張したのであるが、他方でJefferson は、訂正の中にはサイドシークエンスを形成しない「埋め込まれた (embedded) 訂正」という形態があることを指摘している [Jefferson 1987]。これを含めると、われわれはトピック性と修復活動との関係に関する次のような見取り図を描くことができよう。

埋め込まれた修復：失効がマークされず修復だけが生じる。

▲ トピック性を保留しない＝サイドシークエンスを構成しない。  
 ↓ 説明活動を随伴しない。

さらされた修復：失効がマークされる。

(通常の) ↓ トピック性を保留する＝サイドシークエンスを構成する。  
 ↓ 説明活動を随伴しうる。

長引かされた修復：失効がマークされトピック性を保留する形で開始される。

失効そのものに照準を合わせた説明活動の過程で新たなトピックが探索され、トピック推移によって修復が完了する。

＝サイドシークエンスに留まらない。

このような見取り図を得ることによって、われわれは、トピック性の漸進性に修復活動が関与する三通りの仕方を視野に収めることができる。一方には、失効をマークしてトピック性を保留するのを回避するという仕方があり、他方には「失効としてマークされた発話」それ自体に照準を合わせ、それをトピック的語りの端緒として再構成するという仕方がある。そして、従来研究されてきた典型的な修復シークエンスは、これらに並ぶ修復活動の「一つの」局域的組織化として捉えることができるようになる。

また、「長引かされた」修復を視野に収めそこから顧みることによって、サイドシークエンスを形成する典型的な修復活動も、Maynard が指摘したような継起的沈黙のトピック推移による修復 (remedy) も、共に「投企された参与の構図の失効とその回復」という修正・拡大された意味での修復活動の一部として捉え直すのが適切だと考えられる<sup>16)</sup>。

## V 結び：「近過去」と「スムーズさ」

本稿では、「長引かされた」修復活動を完了するものとしてトピック推移が果たされる、というトピック推移形式を検討する中で、トピック性と修復活動の関係についての従来の理解に修正を施し、またその際に、修復活動そのものについても従来の理解に修正を施し

てきた。しかし、トピック性を保留する形で開始される修復活動が、いかにしてまたいかなる意味で「スムーズな」トピック推移を可能にするのかは、まだ十分に論じられていない。本論の結びとして、本節では、このトピック推移形式の特別な「スムーズさ」の意味を論じておきたい。

第一に、それは修復活動の一形態としてのトピック推移であるという点で、Maynardが扱った沈黙の継起を契機とする「境界づけられた」トピック推移と共通している。しかしもちろん、両者には相違がある。沈黙の最中に次のトピックが探索される前者と違い、後者では turn by turn の修復活動が進行しつつトピックが探索される。また、このため後者では、turn by turn の修復活動が失効そのものに照準を合わせる方向に組織化される中から次のトピックの端緒が見いだされる。まずこれらの特徴ゆえ、後者はより「スムーズな」トピック推移として達成されると思われる。

しかし第二に、この「スムーズさ」は、共一選択の連鎖によって生み出される「切れ目ない」トピック推移とも次の点で異なっている。私は前稿で、会話において「今ここ」を離れた事柄への言及が行われる基本的手続きとして「言及フレーム」の明示的設定というもの了指摘した。それは、会話における切れ目ないトピック推移を可能にする一つの基本的装置と考えられた。しかしながら、本稿で扱ったデータの顕著な特徴は、新トピックの導入部分で「数時間前」「25分前」といった「近過去」の事象が参照されているにも関わらず、そこにはいかなる言及フレームも明示的には設定されず、省略的な発話デザインによって導入が行われていることである。しかも印象的なのは、その発話を聞いて**瞬時に＝発話者と同じくらい容易に**、聞き手がそれを想起し同定していることである。

つまりこのトピック推移形式は、turn by turn の修復活動が失効そのものに照準を合わせる方向へと組織化される中で、turn by turn の局域的文脈を越えた近過去の事象がレリヴァントなものとしていわば立ち上がってき、それが言及フレームを明示せずに導入されるのに成功することで、特別な仕方**で**「スムーズな」ものとして達成される、という特徴を持っている。

このような「長引かされた」修復活動を契機としたトピック推移が、常に近過去の事象の参照を伴うのかどうか、それはわからない。ただ、それが「スムーズ」である仕方と近過去の参照との間には、次のような意味で顕著な結びつきがあると思われる。

二つのデータにおいて、話し手と聞き手は、単に同じ内容を想起しているだけではない。むしろ、この瞬時の反応は、両者が**同じ仕方**で（同じキューによって）それを想起していることを現している。これゆえに、両者は、いわば明示されない言及フレームの導入を協働作業として果たすのである。このように、わずかのキューで同じ事象を想起・同定できるということが、一般に遠い過去や未来の事象よりも近過去の共通体験において容易であることは確かだろう。この意味で、近過去の共メンバーシップは、この特殊な形式での「スムーズな」トピック導入にとって好適な素材であることは確かである。

そして、「今ここ」にない事象に言及する言及フレームを、非明示的にかつ協働的に導入するということは、「今ここ」を越えて存在するように見える関係性を表示・確認する特別に強い手続きでありうる。あるいはまた、「今ここ」がそのような「より広い世界」に後援され・縁どられた「今ここ」であったこと、「そのような背景・歴史を背負った私たちが今ここで会話しているんだ」という「場」の構造を、表示・確認する特別に強い手続きでありうる。近過去の共メンバーシップは、そのような関係性の表示・確認のための一つの有効な資源なのである。

われわれはこの特殊な会話的資源を繰り返し繰り返し用いることにより、Goffman の言う「定着した関係 (anchored relationship)」[Goffman 1971, p.189]<sup>17)</sup> を日々つくり出しているのではないだろうか。本稿で見てきたトピック推移形式の特殊な「スムーズさ」とは、それが関係の「定着性」の表示・確証の瞬間 (のケース) であるということに由来すると思われる。

ただし、そのような表示・確証は、それが行われるにいたる過程で、「を笑う」と「共に笑う」との間で行われた「せめぎあい」や物語りからの退出の失効、という「今ここ」での参与の構図の失効の痕跡を消去することによってこそ行われている。従って、トピック導入が「スムーズ」に成し遂げられることは、その過程で失効がないことを意味するのではない。「長引かされた」修復の完了としてもたらされるトピック推移の「スムーズさ」とは、参与の構図の失効の痕跡を消去する能力にほかならない。

## VI 補説：“repair”と“remedy”

本稿では、データに見合う形で修復概念の修正を行うに当たって、Jefferson や Maynard の議論をしばしば参照してきた。ところが、現在修復研究の体系化を図っている Schegloff と彼らとの間には、その用語法に関して若干の食い違いがある。Schegloff は専ら “repair” という用語を用いるのに対し、Jefferson や Maynard はこれと並んで (あるいはより好んで) “remedy” という用語を用いている。この相違は、本論を補足する意味で考察しておくに値する。なぜなら、“remedy” という用語は、周知の通りもともと Goffman の相互行為儀礼論の中心概念であり、Schegloff は Goffman の儀礼論を会話分析の立場から批判しているからである。

Schegloff は批判の中で、1. Goffman 的な意味での “remedy” は通常の会話にはほとんど見られず、会話の構造にとって基本的ではない。逆に、“repair” の組織化は “remedy” に先行する問題である。2. Goffman が “remedy” を重視するのは、Goffman が初期から引きずっている、「面子」を行為の説明原理とする悪しき心理主義ゆえである。という2点を指摘している [Schegloff 1988, pp.94-98]<sup>18)</sup>。

しかし、両者の議論はいくつかの留保をつければ接合可能でもある。第一に、Schegloff が “repair” を会話の構造にとって基本的だといえる最も重要な根拠は、「あらゆる発話が修復を受け得る (repairable)」という命題 [Schegloff et al. 1990, p.33] にあるはずである。遍在する修復可能性は修復を受けずに発話が通用する可能性にとっても基本的条件をなしているとみなし得るからこそ、“repair” が会話にとって基本的重要性を持つのである。他方、Goffman における「儀礼は遍在する」という視点も、相互行為には至るところに予期できない「引っかけ針金 (tripping wire)」が張り巡らされており、このことは儀礼的侵犯を構成しない発話・身体動作にとっても基本的条件をなしている、という意味なのである [Goffman 1971, p.106]<sup>19)</sup>。

もちろん、「遍在する修復可能性」と「張り巡らされた引っかけ針金」との差は大きい。「引っかけ針金」という比喻は、自他の「聖なる自己」に対する侵犯の可能性という心理主義的ニュアンスを込められており、この点が Schegloff のもう一つの批判点でもあった。この批判は要するに、“remedy” の対象となる「トラブル」が、「面子への脅威」という形で心理主義的に予断されていることに向けられている。

この批判は、Schegloff らが “repair” 概念を定式化する際、言語学的な「誤り」の「訂

正」という観念へ向けた批判とパラレルである。彼らは、例えば明かな文法的誤用のような言語学的誤りであっても必ずしも訂正が行われるとは限らないこと、つまり、会話文脈から独立した「トラブル」の定義を行うことはできないことを強調している。心理学的であれ、言語学的であれ、要は会話文脈から独立した「トラブル」の理論的定義を予断的に行うことを、Schegloff は一貫して批判している<sup>20)</sup>。

Schegloff において、遍在する修復可能性という論点はこの批判の帰結なのである。つまり、「トラブル」であるかどうかは局域的に決定されるしかない。だから、いかなる発話も局域的に「トラブル」になりうる。とすれば、われわれは Schegloff による「訂正」から “repair” へというこの歩みを、同じように “remedy” にも適用できるはずである。つまり、“remedy” の対象になるかどうかは局域的に決定されるしかない。ゆえに、いかなる発話も局域的に “remedy” の対象となり得る。

しかし、Schegloff は現在までこのような形で “remedy” を会話分析的に捉え直すことはしていない。むしろ、“repair” は “remedy” に先立つという。なぜだろうか。そこには、“remedy” 概念の心理主義的含意の単なる敬遠という以外の理由がありそうに思われる。

Schegloff は「トラブル」の理論的定義を避けたにもかかわらず、暗に、一定の対象の切りとりを行っているのではないだろうか。そして、そこには「訂正」批判から出発した彼の “repair” 論の歩みが蔭を落としているのではないか。彼は “repair” を「話すこと、聞くこと、理解することにおけるトラブル」に対処する営みとして定義する。また、こうも述べる。「…talk それ自体の回復, repair プロパー…それこそ talk-in-interaction の可能性にとって中心的なのである」[Schegloff 1988, p. 97]。だから、“repair” は “remedy” に先立つ。しかし問題は、与えられた相互行為場面を、何よりもまず “talk” として（あるいは、話すこと・聞くこと・理解することとして）分析することの優先的地位を保証するのは研究者の視線でしかない、ということなのである。おそらくとりあえず確実なのは、そこで人々が何かの活動に共に参与しているということだけであって、それを “talk (in-interaction)” と呼んだ途端に、Schegloff は「そこで行われている活動」と「それに対するトラブル」とを予断せざるをえない。

他方、Goffman は、ある発話がどのような相互行為的出来事なのかは、常に相互行為の全体的枠組に照らしてしか決定できないことにしばしば注意を促している。要するに、Schegloff が「Goffman 的 remedy はふつうの会話にはほとんど見られない」というとき、「見えない」のは Schegloff が会話場面を専ら “talk” の場面としてしか「見ようとしなない」からなのではないか。

とすれば、上記のような一定の修正を施した上で “remedy” を会話分析の対象として取り入れることは、むしろ会話分析の主旨に沿うことだと思われる。残された問題は、単なる形式的接合でなく、実質的に上記のような修正を可能にする論拠が Goffman の議論の中に存在するかである。

その論拠は “remedy” を「聖なる自己」「面子」ではなく「立場設定 (alignment)」という概念に定位して捉え直すことによって与えられる<sup>21)</sup>。あらゆる発話・身体動作は「社会的状況」の中での話者の「立場を設定」する働きを持ち、その立場とは他の会話者のやはり社会的状況の中での立場と相関的に設定される。つまり、社会的状況の中で発話・身体動作を行うことは、参与者の立場設定の布置としての参与の構図を投企することにはかならない。この観点からは、“remedy” における「トラブル」とは、この投企された立場設定=参与の構図の失効である。二次的に「聖なる自己」への侵犯としても捉え得るような

失効も、まずは立場設定＝参与の構図における失効として生じる。そして同様に、Schegloff が主として扱ってきたような “repair” における失効も、一定の参与の構図の失効として身体的に組織されることによって可能になる [西阪1992, p. 71]。(そもそも Goffman の儀礼論を「聖なる自己」の心理学と捉えるのは一面的である。なぜなら、儀礼は自己・他者・場面・より広い社会の全てに対する効果として想定されていたのであるから。私がここで強調しているのは、このように特定の社会的単位体に対する効果として分岐する以前の、いわば前人称的世界での局域的組織化に依拠して儀礼を捉える視点が Goffman の中に存在した、ということである。)

従って、私はここで改めて、「張り巡らされた引っ掛け針金」および「遍在する修復可能性」とは、まずは、発話において投企された参与の構図(＝立場設定)の失効の可能性であると考えたい。この観点からは、修復の開始から終了までのシークエンスとは、失効した参与の構図を回復する手がかりの協働的探索活動であり、その探索は沈黙を用いて行われることもあれば、スムーズな順番取りを用いて行われることもある、といえる。そして、“repair” と “remedy” はこの意味での修復活動を、異なった側面に焦点を当てて捉えた概念だと考えられる。

われわれは日常的会話者として、言語学的な「訂正」が行われたと感じることもあれば、Goffman 的意味での「面子」の「救済」が行われたと感じることもあるのであり、それらはいずれも局域的な参与の構図に関する「自然言語に習熟」[Garfinkel & Sacks 1970, p. 344] したメンバーとしての直観なのではないだろうか。この観点からは、「この発話は失効なのか？」という問は、分析者にとってのみならず会話者にとっても常に開かれている。

付記：本稿は、平成2－3年度文部省科学研究費補助金一般研究(B)「会話分析を中心とした社会的インターアクションの研究」(研究代表者：谷泰)、および、平成5年度文部省科学研究費奨励研究(A)「日本人の対面的コミュニケーションにおける参与の組織化の研究」(研究代表者：串田秀也)による研究成果の一部である。また、本研究は二度にわたって「エスノメソドロジー・会話分析研究会」の席で発表する機会を得、同研究会のメンバー諸氏から多くの貴重な助言をいただいた。記して感謝したい。

#### トランスクリプトの中で用いた記号

- |      |                                  |
|------|----------------------------------|
| {数字} | 沈黙の秒数。なお、発話中の短い沈黙は一字分空けることで表示した。 |
| [文字] | 身体動作。なお〔笑〕は笑い声が聞こえず笑顔をしている場合を指す。 |
| 、    | 上下の行が括弧の位置で同時に始まっていることを指す。       |
| <文字> | よく聞き取れなかった部分。                    |
| <……> | 全く聞き取れなかった部分。                    |
| ?    | 末尾が昇り調子の抑揚で発話されている部分。            |
| h    | 笑い声で発話された部分。                     |

## 注

- 1) 本稿では「トピック」という言葉の理論的定義は行わない。「トピック」という言葉は、何らかの理論的定義を施される以前に、既に日常世界において用いられている。本稿にとって「トピック」とは、エスノメソドロジストの言う意味でメンバーの現象であり、それは分析の対象であると共に資源でもある。
- 2) ここで「認知的のみならず道徳的」というとき、Garfinkel の期待破棄実験への Heritage の次のコメントが念頭にある。期待破棄実験の被験者が直面した選択とは、単に「通常の／理解可能な」行動と「無意味な」行動間の選択ではなく、「通常の」行動と「まだ意味がわからないけれどわかったなら愉快ではないはずの」行動との間の選択である。つまり、被験者はある実験者の行動を通常ではないと認知したとき、必ず同時にそれを規範からの「動機づけられた」離反として認知したのである。[Heritage 1984, pp. 99-100]
- 3) この点について詳しくは、串田1994をご参照いただきたい。
- 4) 本稿では、“repair”および“remedy”を共に「修復活動」ないし「修復」と訳し、区別しない。この理由については「Ⅵ 補説」で論じている。ただし、別の研究者の議論を引いている箇所では、その研究者の用いている方の用語を( )で示す。
- 5) 例えば、Jefferson 1972, Jefferson 1975, Jefferson 1987, Schegloff 1979, Schegloff 1987, Schegloff 1992, Schegloff, Jefferson & Sacks 1990 など。
- 6) Keenan & Schieffelin はトピックを「命題」として定義する。注1でも述べたとおり、本稿ではこうしたトピックの理論的定義は採用しない。しかし、トピック性と修復活動との関係に関する彼らの議論は、トピックの定義にかかわらず有意義である。なお、Schegloff は会話中の誤解の源泉として、「言及」に関するものと「シークエンス上の含意」に関するものを挙げている [Schegloff 1987]。前者は概ね、Keenan らの3. と4. に対応し、後者は Keenan らが十分には考慮していない発話の「効力」に関するものである。これを Keenan らの図式に付加すれば、これまでの修復研究で扱われてきた「トラブル」の種類はほぼ網羅される。
- 7) トピック境界づけマーカーに関しては、さしあたり Schegloff & Sacks 1974, Maynard 1980, Button & Casey 1984, Button & Casey 1985などを参照のこと。
- 8) これらは、この会話断片の一つの理解可能性／記述可能性を構成するものである。つまり、私たちがこの会話断片を読んで最初に「何を話しているのか分かる」時、その理解には少なくとも以上の観察が含まれるはずである。これらは要するに、この会話断片に関して構成し得る一つのゲシュタルトの見出し／指標 (index) である。以下の分析は、これらの観察が見出し 指標であるようなゲシュタルトが、個々の発話を通じていかに作り出されるのかを再構成するものである。
- 9) ここで「ユニゾン」とは、全く同じ語句を二人以上の話者がほぼ同時に発話し始めて、ほぼ同時に発話し終わる現象を指す。この現象は、いくつかの理由で極めて興味深いものであり、別の機会に詳しく考察する予定である。
- 10) ただし、最近の Schegloff の「複合的修復空間 (multiple repair space)」に関する卓抜な議論 [Schegloff 1992, pp. 1326-1328] は、修復シークエンスのこうした組織化の可能性を射程に取り込めるものである。
- 11) この議論で Maynard は “repair”ではなく “remedy”というタームを用いている。しかし、Maynard の論旨は、Sacks らによる会話の順番取りの修復活動 (repair)の議論 [Sacks et al. 1974] と整合的である。
- 12) Jefferson 1978における次の言葉を参照。「他の仕方では「物語 (story)」の一部を構成しないで

あるう発話が「物語り (storytelling)」の一部としてシークエンス分析できるのは、…物語が語られるのか、いかに語られるのか、それは完了したのか続いているのか、それは会話上の出来事として何に帰着するのか、といったことの交渉に用いられていると見なし得ることによってである」 [Jefferson 1978, p.237]。

- 13) ここで言う「参与の構図」とは、Goffman が「参与枠組」と「産出フォーマット」という二つの側面から成る「立場設定 (alignment/footing)の布置」として捉えようとしたものである [Goffman 1981]。Goffman の議論は十分なものではないが、現在私には、データに即して述べる以上に一般的な形でこの概念を十分に再定式化する準備はない。二つの側面のうち前者に関しては、西阪が「身体的に組織された参与フレーム」という形の再定式化に成功しているが [西阪 1992]、本稿で「参与の構図」というときには、後者の側面も含んだより広い意味をもたせている。後者の側面の一部に関しては、前稿で「言及フレーム」という用語を用いて再定式化を試みたのでご参照いただきたい [串田1994]。
- 14) Maynard がこの可能性を論じられなかったのは、一つには、彼が扱った会話データが全て2者間のものであったからと思われる。また、それゆえ、本稿で扱っているような長引かされた修復活動を契機としたトピック推移は、少なくとも3者以上の会話において主に生じるという可能性はある (櫻村愛子氏の示唆による)。
- 15) この部分が退出の試みとして聞かれ得るのは、次の二つの事情にもよる。1. 退出の試みが「受け手の反応を引き出す」ことを課題とする以上、そこでは受け手が反応しうる要素を受け手が反応しうる発話デザインで差し出すことが必要である。そこで、もし028が退出の試みであるなら、Bが特に補足説明なしに「やんちゃな子猫」という固有名詞を突然出したということは、「Aもそれを知っている」とBがメンバーシップ分析していたことになる。この分析は、一定の根拠がある。というのは、Bの長い物語りの開始直前 (データ2以前の部分) に、Aは「大人の絵本」という番組を知っていることを表示しているからである。2. また、Aによるこの知識の表示を受けて、Bの物語りは「あのーぼくちょっとウンチク言わせてもらうならね」という発話で開始されている。Bの物語りはここから、同じ時間帯の同じテレビ局の番組を過去から現在へ順を追って数え上げていくものであり、「でーやっとな今の…」 (023) という発話によって、現在のテレビ番組に至るのである。このため「やっとな今」というこのマーカーは、語りが終局を迎えたことを表示するものとして聞かれ得る (西阪仰氏の示唆による)。
- 16) 上の見取り図は「トピック性の漸進性に対して修復活動が関与する仕方」に関するものであるため、Maynard のケースは入っていない。Maynard のケースは3者と違い、トピック性が明白に「切断」される場合である。しかし、失効がマークされる修復活動の一形態として、それは「さらされた修復活動」や「長引かされた修復活動」と共通の観点から捉えられると思われる。
- 17) 「定着した関係」とは「匿名的関係」に對置される用語で、互いの個人的アイデンティティの同定とその事実の相互認知、互いの関係に取り消すことのできない出発があったことの相互公認、の2点を特徴とする。
- 18) Schegloff のこの批判については、既に平が詳細な検討を行っている [平1993]。本補説は、この平の議論に多くを負っている。
- 19) 「自己呈示の遍在性」という Goffman の論点も、しばしば「Goffman の描く基本的人間像は呈示される自己像を意図的に操作している」というような形の、パラレルな批判を受けてきた (例えば、山田 1991, p.266)。われわれが発話・身体動作を「話者に関して特に何かを意味している」と見なすことは頻繁には生じない。また、話者が「自分に関して特に何かを意味しよう」として発話・身体動作を行うことはさらに希であろう。これらの事態をさして「自己呈示」と呼ぶなら、

確かに自己呈示は遍在しない。しかし、Goffman の言う意味は、全ての発話・身体動作は「話者に関して特に何かを意味する」可能性を持つのであり、この遍在する可能性は「特に何かを意味しない」発話・身体動作にとっても基本的条件をなしている（従って、多くのルーティーン的発話・身体動作も「ノーマルな外観 (normal appearances)」という自己呈示を行っていることになる [Goffman 1971, pp. 238-332]）、ということだと私は考える。そしてこの遍在する可能性が、時に意識的・意図的に行為者に志向されることもまた経験的事実であろう。この場合を特に、Goffman は「印象操作」と呼んだわけである [Goffman 1969, p. 13]。上記のような批判は、印象操作の問題をより広い自己呈示の問題と混同することから生じていると思われる。

- 20) ちなみに、「訂正」から“repair”へのこの歩みは、「発話行為」から「隣接ペア」への歩みとパラレルであると言える。会話分析が発話行為論を批判して、発話行為の効力は相互行為的にしか発効しないと述べたことは、そのまま発話行為の「失効」にも当てはまる。Schegloff らの“repair”概念の隠れた意図は、オースティン流の発話行為の「失効」ないし「不適切性」の理論を批判することにあつたといえよう。また、この関連で、「遍在する修復可能性」という論点は、デリダがオースティンを批判して述べた「遍在する反復可能性」[Derrida 1971]に対応する会話分析の立場からの論点だとみなし得る。
- 21) 「立場設定」および「社会的状況」という概念について詳しくは、串田1988をご参照いただきたい。また、佐竹はこの概念を梃子にして会話分析と Goffman とのより広範な理論的接合の可能性を探っており、そこでは本補説の議論をさらに展開する上で重要ないくつかの論点が示唆されている [佐竹1993]。
- 22) この意味で、本補説は単に本論で用いた用語への注釈以上の意味を持つ。つまり、補説を踏まえるならば、私が本論で行ったデータ記述はいくつかの点で別様にも有り得る。特に触れておきたいのは、二つのデータで新トピックが導入される部分が直観的にある種の「ゲーム的」な印象を与えるということである。例えば、この部分を「ボケ」と「ツッコミ」といった漫才用語で表されるような「ゲーム的」やりとりとして記述することも可能に思える。ただその場合も、修復活動の形を借用することで「ゲーム」を行っているのか、「ゲーム」の形を借用することで修復活動を行っているのか、という問題は残される。そして、少なくとも通常の会話分析的データに関する限り、常に一つの種類の「ゲーム」が行われている可能性はある。それは、ビデオカメラないしテーブルコーダーに「撮られる」という「ゲーム」である。ある会話データが「いかなるゲーム（「まじめな」やりとりも含めて）なのか？」は、実際問題としては会話分析派が主張するように、ディテール（例えば、視線、発話のタイミングなど）の組織され方を手がかりに記述するしかないし、この方針を徹底して追究してきたところに彼らの最大の功績がある。しかし、この記述方針が「いかなるゲームなのか？」の記述可能性を原理的に保証するものであるかどうかは依然未決である。

#### 参考文献

- A. Adato 1980. "Occasionality" as a constituent feature of the known-in-common character of topics", *Human Studies* 3-1.
- G. Button & N. Casey 1984. "Generating topic: the use of topic initial elicitors", in J.M. Atkinson & J.C. Heritage (eds), *Structures of Social Action*, Cambridge University Press.
- G. Button & N. Casey 1985. "Topic Nomination and Topic Pursuit", *Human Studies* 8.
- J. Derrida 1972. "Signature, événement, contexte", *Marges de la philosophie*, Les Editions de Minuit (邦訳1988「署名・出来事・コンテクスト」『現代思想』16-6).

- K.Foppa 1990. "Topic Progression and Intention", in I.Markova & K.Foppa(eds), *The Dynamics of Dialogue*, Harvester Wheatsheaf.
- H.Garfinkel & H.Sacks 1970, "On formal structures of practical actions", in J.C.Mckinney & E.A.Tiryakian(eds), *Theoretical Sociology*, Appleton Century Crofts.
- E.Goffman 1969, *Strategic Interaction*, University of Pennsylvania Press.
- E.Goffman 1971, *Relations in Public:Microstudies of the Public Order*, Harper & Row.
- E.Goffman 1981, *Forms of Talk*, Basil Blackwell.
- J.C.Heritage 1984, *Garfinkel and Ethnomethodology*, Polity Press.
- G.Jefferson 1972, "Side Sequences", in D.Sudnow(ed), *Studies in Social Interaction*, Free Press.
- G.Jefferson 1975, "Error correction as an interactional resource", *Language in Society* 3.
- G.Jefferson 1978, "Sequential Aspects of Storytelling in Conversation", in J.Schenkein(ed), *Studies in the Organization of Conversational Interaction*, Academic Press.
- G.Jefferson 1987, "On Exposed and Embedded Correction in Conversation", in G.Button & J.R.E.Lee(eds), *Talk and Social Organization*, Multilingual Matters.
- E.O.Keenan & B.B.Schieffelin 1976, "Topic as a Discourse Notion:A Study of Topic in the Conversations of Children and Adults", in C.N.Li(ed), *Subjects and Topic*, Academic Press.
- 串田秀也 1988, 「『フレーム』と『関与』－相互作用分析における『コンテクスト』の問題へのゴフマンの視角－」『ソノオロジ』103.
- 串田秀也 1994, 「会話におけるトピック推移の装置系」『現代社会理論研究』4.
- D.W.Maynard 1980, "Placement of Topic Changes in Conversation", *Semiotica* 30.
- 西阪仰 1992, 「参与フレームの身体的組織化」『社会学評論』169.
- H.Sacks, E.A.Schegloff & G.Jefferson 1974, "A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation", *Language* 50.
- 佐竹保宏 1993, 「相互作用秩序の分析可能性－『フレーム』と『エスノメソッド』－」『現代社会理論研究』3.
- E.A.Schegloff 1972, "Notes on a Conversational Practice:Formulating Place", in D.Sudnow(ed), *Studies in Social Interaction*, Free Press.
- E.A.Schegloff 1979, "The Relevance of Repair to Syntax-for-Conversation", in T.Givon(ed), *Syntax and Semantics12: Discourse and Syntax*, Academic Press.
- E.A.Schegloff 1987, "Some sources of misunderstanding in talk-in-interaction", *Linguistics* 25.
- E.A.Schegloff 1988, "Goffman and the Analysis of Conversation", in P.Drew & A.Wooton(eds), *Erving Goffman:Exploring the Interaction Order*, Polity Press.
- E.A.Schegloff 1992, "Repair after Next Turn:The Last Structurally Provided Defense of Intersubjectivity in Conversation", *American Journal of Sociology* 97-5.
- E.A.Schegloff & H.Sacks 1974, "Opening up closings", in R.Turner(ed), *Ethnomethodology*, Penguin Education.
- E.A.Schegloff, G.Jefferson, & H.Sacks 1990, "The Preference for Self-Correction in the Organization of Repair in Conversation", in G. Psathas(ed), *Interaction Competence*, University Press of America.
- 平英美 1993, 「会話分析とGoffman(1)」『大阪教育大学紀要 第II部門』41-2.
- C.West & A.Garcia 1988, "Conversational Shift Work:A Study of Topical Transitions Between

Women and Men”, *Social Problems* 35-5.

山田富秋 1991, 『『権力作用』からのパースペクティブ』, 山田富秋・好井裕明『排除と差別のエスノメソドロジー』, 新曜社.

## Topicality and Repair

Shuya KUSHIDA

*Department of Sociology, Osaka Kyoiku University, Kashiwara, Osaka 582, Japan.*

The aim of this paper is to consider the relationship between topicality and repair in conversation. In closely analysing two conversational data, I argue as follows. As a conversational event the repair has a specially ambivalent character. When repair is initiated, conversationalists can attend both to the act which “is to have been accomplished” and the “trouble source” itself. According to the way this ambivalence is locally managed through repair sequences, the ongoing topic can be either reestablished (as a result of side sequences) or changed. When changed, we see what can be called “extended” repair sequences there and this form of topic movement can be seen as a form of repair proper. In conclusion, I argue that there are three forms of repair in relation to topicality : 1. “embedded” repair which does not constitute side sequences (the ongoing topic is not discontinued), 2. “exposed” repair which constitutes side sequences (the ongoing topic is discontinued but restored), 3. “extended” repair which does not constitute side sequences because repair is accomplished by introducing a new topic.

Key Words : topic, topicality, repair, remedy, conversation analysis